

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第50号（令和5年12月）

あゆむ「さあ、今日も板碑調査だな。」
ふみお「そう、ここが阿弥陀地だ。」
ミドリ「お堂があって、広くて雰囲気があるわ！
きっと、阿弥陀様がまつられているので
しょうね？」
あゆむ「碑もたくさん立っている。この中に今日
見るものがあるのかな？」
文じい「いや、もう少し向こうじゃ。ここは、お
参りだけにして、帰りにまた見よう。」
ふみお「あそこに説明板が見える。」
ミドリ「下に小さめの板碑があるわ！」



あゆむ「おお、なんかおもしろい形
だね。人の顔みたいだぞ！」
ミドリ「そうね。目と口だけのマス
クマンという感じね。」
ふみお「これが種子なのかな。だと
したら何を表しているんだ
ろう？」
ミドリ「説明板を見てみましょう。」
ふみお「えーと、鎌倉時代の元応3
年(1321)親の菩提を弔うため
に建てられたとある。つまり、
亡くなった親の法要をしたわ
けだね。」
ミドリ「そうね。そして、やっぱり
目と口みたいなのが種子で、
“地藏”の“イー”という
ものだって。」

元應三年板碑

阿弥陀地の

げ
ん
お
う

い
た
び

あ
み
だ
ち



文じい「ふむ。地藏尊は、お釈迦さまが 入滅後、つまり、亡くなられた後（過去）、弥勒菩薩様がこの世に現れるまでの間（未来）、無仏の世界（現在）で救ってくださって、極楽浄土へ導いて下さる菩薩さまとされている。」

ふみお「説明板の最後の方には、これは、六地藏の中の金剛宝地藏で、災禍、つまり、天災等の災害を防ぐ地藏だとも書いてある。」

文じい「ふむ。金剛宝地藏は、もともと六地藏の中の餓鬼道という苦しい世界にいる者を救うお地藏様と言われてもいる。」

ミドリ「ふーん。そういえば、いろいろなお地藏様が道端に立っているわね。」

文じい「それから、この板碑を地域の人たちは、ドウロクジンサマ（道陸神様）とも呼んでいたそうじゃ。」

あゆむ「へえ、おもしろいね。どういう意味？」

文じい「道祖神とも言うが、道端や村の境などにあって、外からの悪いものを防ぐ神で、旅行安全とか、子どもと親しい神などとしてもまつられてきたようじゃ。」

ミドリ「本当におもしろいわね。よく手を合わせて拝みましょう。」

あゆむ「次は、阿弥陀堂だね。中は見えないけど。」

文じい「言い伝えによると、村の北東に一年中枯れることのない湧き水があったという。そして、そこに阿弥陀如来様が天から降りられた。」

ミドリ「それを安置するために阿弥陀堂が建てられて、それで、ここが阿弥陀地ね。」



文じい「ふむ。むかし、阿弥陀寺と言っていた時もあったという。そして、中には、中央に阿弥陀如来、右は薬師如来、左は観音が安置されているらしいが・・・。」

あゆむ「その他には・・・？」

文じい「“願人踊り”の絵が掛けられている。」

ミドリ「それ、何の踊りなの？」

文じい「神仏にお祈りするのに、直接自分ができない時に、代わりに願人坊主といわれる人をお願いをした。坊主たちは、そのような地域の人々の願いを願人踊りなどをしてお祈りをしたという貴重な絵じゃ。」

ふみお「ぜひ見てみたいね。それにしても、その他の板碑やお地藏様などもいろいろあるね。これは、大杉碑かな？」

文じい「そう。昔は樹木が茂り“弥陀の大杉”と呼ばれる杉が立っていた。後に暴風で倒れたが、記念して碑を建てたということじゃ。今は、桜の木じゃな。」

あゆむ「それから、この碑も大きいね。ぼくでも読めるよ。八日と、それから塔だよね。」



文じい「そう。この碑は、昔、土岐の殿様が、松山に茶室のような別荘をつくったときに、庭石にと運んで行ったもので、後から戻されたというものだそうじゃ。」

ミドリ「そんなこともあったのね。阿弥陀地には地域の人々の思いや歴史がいっぱい詰まっているのね。」